

発行者 中央大学学生会白門58会支部

東京都新宿区高田馬場2-14-6 アライビル7階 コンサルファーム有限会社 内

<https://chuo58.com/>

白門58



検索

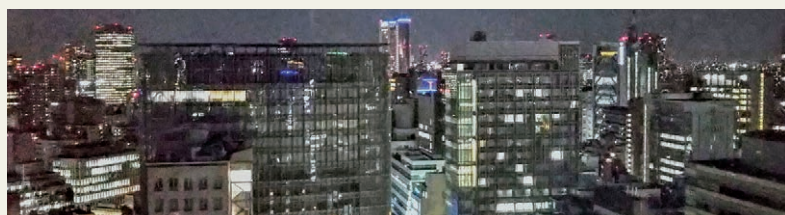
卒業
40年
記念号

同期それぞれの 卒業40年を振り返る

同期の
寄稿満載!!

2023年度総会報告

駿河台キャンパス19階で 総会と懇親会を開催



2023年8月4日金曜日、白門58会2023年度総会・懇親会を2023年4月に開校した新校舎・中央大学駿河台キャンパスの19階で開催しました。

当日は12名の参加。人数は少なめでしたが、久々に対面での開催で楽しい会になりました。参加者には『中大スポーツ』も配布。総会ではレジュメを見ながら幹事が説明し、拍手で承認。その後は早速、懇親会となりました。

食事をしながら自己紹介と近況報告。還暦越えの58会メンバー、それぞれ色々あります。現役続行の方、定年後に違う職種に就いた方、悠々自適中の方、皆さんの近況報告に興味深く

聞きました。特に大病を克服して元気に参加してくれた方々のお話には勇気づけられました。

今回、58会総会開催場所としては最高高度でした(笑)! 駿河台キャンパス19階のレストラン『Good View Dining』、御茶ノ水は意外と高いビルが少なく眺望抜群で気持ちよかったです。材料秘密のハイボール“中大ボール”も人気でした。ここで出される唯一の日本酒“紀土”は「キッド」と読むそうで、これも美味しかったです。また何かのイベントで利用したいと思います。次回はもう少し参加者が増えるよう頑張ります。

(会計 柳季幸 文・文)



白門
58会

同期それぞれの 卒業40年を振り返る

昨年、白門58会の同期は、1983年の卒業40周年を迎えました。コロナ禍にあって記念行事等の企画は見送らざるをえませんでした。会報の発行を通じ、会員それぞれの卒業40年を振り返ってもらおうと、寄稿を呼びかけました。今回、締め切りに間に合った方々の原稿を掲載します。学生時代の思い出、卒業後のこと、近況などは継続して募集しています。仲間の原稿を読んで思い出したこと、考えたこと、伝えたいことがあれば、ぜひ寄稿してください。

寄稿 『週刊文春』にタブー?!

01 あの編集部で学んだこと

渡辺 勘郎（法・政）

予定調和を見透かされ 勝負しろ、と求められ

「お前は、アポイントを取ってする取材で満足か？『Number』の、予定調和的な原稿を書いていて満足してるのか？」

こう言われたのは、大学を出て10年後、フリーのライターになって4年目で、『Number』に書き出して2年目の頃。しかも言葉の主は当の『Number』の前編集長。何となく思っていたことを見事に言語化されたような気がしたのと同時に《編集長自身にも葛藤があり、それがこういう表現になったのだろう》と思えてきて、だからこそズシリとリアリティが感じられ、《抗えない》と思った。

30年経った今、振り返ると《あのとき、この言葉に出会えて良かった》と思わずにいられない。この言葉に背中を押されたからこそ、憧れていた、居心地のいい世界に安住してしまわずに済んだ。居心地は悪いが、事実を突き詰めて率直に書く、予定調和とは真逆の、いかに読者を驚かせるかで勝負する刺激的な世界に踏み出すことができた。正に人生のターニングポイントだった。

ちなみに、『Number』は文藝春秋が発行しているスポーツグラフィック誌。我々の世代が大学生の頃、創刊された。それまで、スポーツ好きの主たる情報源はスポーツ新聞。カラーグラビアとロングインタビューが一杯載っているこの雑誌は異

文化のように感じられ、新鮮だった。

もっとも私は、《だから文藝春秋に就職しよう》とは思わなかった（その難関ぶりを知っていたから、思えなかった、というのが実態です）。

中大OBの力を借りて 憧れの舞台に辿り着いたのに……

そんな私は全国紙の記者を目指したものの努力が全く足りず、採用試験は悉く不合格。出版部のある中堅の印刷会社に就職し、絵本と日産自動車のマニュアルの編集を経験して《やっぱり、記者になりたい》という思いが募り、出版業界紙に転職。

その取材で知り合った文房具の専門誌の編集長に誘われて再転職すると、同誌で担当した筆者に中大法学部OBでニッポン放送に勤務されていた鳥海忠氏がいらした。《30歳前に独立してスポーツを取材しよう》と考えてフリーライターになった私に、彼は二つの仕事を紹介してくれた。一つは朝日新聞系列のCS放送局『衛星チャンネル』でのニュース原稿書き。もう一つは、やはり中大法学部OBで光文社にいらした小井貞夫氏が編集長として創刊した男性誌『ゲイナー』の取材・執筆。

さらに、衛星チャンネルのデスクの紹介で日刊スポーツ出版社に挨拶に行くと、そこにも中大法学部OBがいて、すぐ高校野球とプロ野球の取材をさせていただけることになり……と、ポイントポイントで中大OBの力を借りてステップアップしていくことができた。

そして高校球界、プロ野球界で人脈を作り、《勝負!》とば

かりに『Number』編集部にあポなし飛び込み営業。今の時代なら門前払いだろうが、30年前はスルッと入れてくれた。しかも編集部は гаранとしていて設楽敦生編集長しかいなかったから、苦もなく直に話すことができ、「じゃ、書いてみるか」と、その場でインタビュー記事を3本、発注してくれたのである。天にも昇る気持ち、というのは、こういう感じか、と思った。

その後も『Number』で書かせていただいて少しずつ実績を積み、1年ぐらいて《スポーツノンフィクションライターと書いた名刺を作らせて戴いてもいいかな》と思っていた矢先、冒頭の場面となる。

設楽氏に呼び出されて居酒屋に行くと、彼の隣には、あの有田芳生さんがいた。二人を前に緊張して座ると、唐突に『週刊文春』の記者にならないかと言われた。その時点で設楽氏は『週刊文春』の編集長に異動されてはいたが、私にとっての彼は憧れの雑誌でスポーツノンフィクションを書ける立場に引き上げてくれた恩人。その方が、である。有田さんも「やった方が良い」と畳み掛けてくる。それでも迷っている私に設楽氏が投げかけてきた言葉が、冒頭のものだった。

“人の不幸は蜜の味” 週刊誌の現場で痛感

こうして始まる私の週刊誌記者人生は1995年から。それは何とも象徴的な年で、いきなりスポーツ選手のインタビューなどとは全くの別世界を見せられることになる。

1/17に阪神淡路大震災が起きた。大阪から先は電車では行けず、知り合いの知り合いの居酒屋で原付を借り、神戸に向かった。高速道路の高架が倒れ、倒壊した家が道路を塞ぐ中を走って行った……。

3/20にはオウムが、あの地下鉄サリン事件を起こす。朝、デスクからの電話で「三井記念病院に行け」と言われ、訳も分からないまま秋葉原に向かった……。

“悲惨”という言葉では足りない被害者たちの現実取材して歩いていると、なんで俺はこんなことをしているのだ？ という疑問が頭を離れなくなった。それでも、その場の現実をレポートするため、無礼を承知で見知らぬ人の家のチャイムを押し、質問し続けなければならない。

そんな自分の背中を押す理屈を探し、《知りたい人（読者）がいるから、それに応えるためだ。読者の代わりに聞いているのだ》と考えるようにした。しかし大義名分が見付かったかのように思ったのも束の間、それを揶揄するかのよう《人の不幸は蜜の味》という言葉が頭の中をグルグルし出す……不幸が大きければ大きいほど記事は読まれ、雑誌は売れる……そんな現実を目の当たりにしたからだ。予定調和の、読み心地のいい記事なら避けるだろう“現実”。知りたくはな

かったが、それが人間の本質に近いものなのだろうと、あの頃は毎日思っていた。

その証明のように、二つの大惨事が落ち着くにつれ、私に振られるテーマは徐々に得意分野のスポーツになっていく。

スーパースターは偉ぶらない “ミスター”が教えてくれた

当時のスポーツと言えば……まず野球、それも巨人。デスクからは、よく「じゃ、巨人で何か、よろしく」というアバウトな発注があった。その場合の話題の中心として座りが良かったのは、やはり“ミスター”長嶋茂雄氏。巨人の次は阪神タイガースで、その中に星野仙一、野村克也両氏の話題があった。

週刊誌記者になってから実感したのが、長嶋氏はスターではなくスーパースターだということ。彼は朝、週刊誌記者が家の門の前に立っていても嫌な顔をするどころか、あの、皆さん御存知の笑顔で「ごめんね～。広報を通してくれないと喋れないんだよ～」と、こちらに気を遣ってくれるのだ。

対象的で印象的なのがテニスの伊達公子女史。彼女の家まで何度取材に行ったか分からないが、その全てで完全に無視された。目の前を気味が悪いほどの無表情で通り過ぎて行った景色は忘れられない。

有名人への突撃取材で笑顔で対応してくれる人は、滅多にいない。スターは偉ぶるが、スーパースターは偉ぶらないのだ。

それと、やっぱりONとは違うな、と思ったのがノムさんと野村克也氏。象徴的だったのがサッチーこと沙知代夫人のエピソードで、こんなことがあった。彼らの息子のカツノリの取材をしていたら編集部にサッチーが電話してきて、こうやってきたのだ。

「何が聞きたいの？ バーターで、グラビアページをくれない？ 知り合いの……さんを紹介して欲しいんだけど」

もちろん、即座に断った。私が知る限り、週刊文春はバーターを条件に情報を得たりしないが、サッチーがあんなことを言ったのは、そういうことをするメディアが存在したからだろう。

ことほど左様にサッチーは強引・剛腕で、それをノムさんは頼っていた。南海ホークスを追われたノムさんがヤクルトで監督になれたのは「夫人が親会社にツテがあり、夫人が売り込んだ」と言われ、「だからノムさんは沙知代さんに頭が上がらない」と言われていたものだ。

話をスーパースター・長嶋氏に戻し、皆様（特に、彼のファンだったあなた）に是非、お伝えしておきたい“言葉”がある。ミスターに可愛がられていた記者が、あるとき耳にして驚いた肉声なのだが、それは「長嶋茂雄でいるのも疲れるんだよ」

というもの。

そう。ミスターは、皆が期待しているミスターであろうと“している”のだ。もちろん、ミスターを大学生時代から知っている人に言わせれば、皆が知っているミスター的な言動はネイティブなもの。だが、ミスターとて人間。疲れているときもある。それでも彼は誰かが自分を見ていれば、期待を裏切らないように、気を抜かず、ミスターであろうと意識して振る舞っているのだ。

万能ではない その自覚が大事

さて、『週刊文春』編集部に11年いた私は疲弊し切って辞めることになるのだが、笑い話を一つ、披露したい。私がいた頃は“文春砲”とは言われていなかったが、いつも勝負していたのは同じ。だから疲れた。

ある日、編集部にいたとき、某かつらメーカーに関してのタレコミ電話を受け、これは記事になると思ってデスクに報告すると……

「ダメだよ。そこ、広告出てるじゃん」

「え！ 週刊文春にタブーがあるってことですか？」

ちょっと笑いながら突っ込むと、デスクは、
「そりゃ、そうだよ」と言い、こう続けた。
「商業媒体なんだからさ（笑）」

（肩の力の抜けた、このデスクは、書き手の思いを尊重し、原稿の直しの指摘は必要十分という編集者。私が出会った編集者の中で一番、信頼できる方だった。こののち直木賞の選考に関わる立場にもなられたが、残念ながら中大OBではありません（笑））。

で、私は、こう思った。

警察でも何の公的機関でもないから、限界はある。万能ではない、と自覚すれば、正義の味方気取りの勘違いはできなくなる。記者は、地道な取材で事実をかき集め、それを積み重ねて記事を書くのが仕事。それができて初めて勝負できる。そうやって、おかしいことに「おかしい」と言い続けてこそ、商業媒体の報道ではあっても存在価値がある。そして、それは、アポイントを取ってする取材だけではできないことなのだ。

寄稿

02 卒業から今まで 人生、これでいいのだ 葛西 充（法・政）

日本一司法試験合格者を輩出するラーメン屋

お試して受けた信託銀行の就職試験にすべて失敗した私は、当初の計画通り司法書士になろうと、墨田区の司法書士事務所に就職した。仕事がハードで人の入れ替わりの激しい事務所だった。半年で一番ベテランとなり、無資格なのに不動産売買の決済立ち合いにも行かされた。これでは勉強できないと、2年目（昭和59年）の12月でそこを辞め、実家の母が経営する中華料理（ラーメン）店を手伝いながら司法書士試験の勉強をすることにした。試験は7月だったが2回目で合格することができた。その合格発表の前、昭和61年10月に早稲田司法試験セミナー（今あるか不明）の基礎講座の無料授業に出てみたところ、とても面白かったので、司法試験受験の道に足を踏み入れてしまった。講座に通いながら中央大学真法会の答案練習会にも参加していたが、難しくてさっぱりできず、会独特の封建的ともいえるような雰囲気にも馴染めずにいた。

そんな頃、大学から、新築した駿河台記念館（現在の駿河台キャンパスの前の建物）に司法試験受験の研究室（駿河台研究室）を作るので、入室試験を受けないかと案内が来た。真法会の答練を受けていたからだと思う。定員108名で定席を与えられ、たしか朝7時から夜11時まで利用可能だった。

入室した私は、昼の4時間は自転車で5分ほどの実家に帰り仕事をするが、それ以外は研究室で夜まで勉強するという生活になった。そこでは多くの仲間ができて、実家の店が近いこともあって、何人もアルバイトに来てくれた。研究室は2年で辞めたけれど、研究室主催の答案練習会に通い、勉強は続けた。仲間から誘われて、何人もの司法試験委員（問題を作り採点する人）の先生（他大学）の授業に年間通して（勝手に）出たり、それをテープにとって店のアルバイト仲間と聞きあったりした。どの先生も受験生が聞きに来ていることは気付いていて、中には問題を決める時期に授業とは関係のない論点を話し出す先生もいた。「あっ、今年がこれが出るな」と思ったらその通りだったことが何回もあった。

当時、中央大学の数ある司法試験受験研究室の中では、駿河台研究室関係の合格者が一番多かった。合格者の中に私の店でアルバイトをしてくれた人が大勢いて、店は間違い

なく日本で一番、司法試験合格者を輩出するラーメン屋であった。計20人近くは合格している。なお、これらは法科大学院を前提とした今の新司法試験とは違う旧試験の頃の話だ。当時は新築だった駿河台記念館も2023年に駿河台校舎として建て替わり、そこに法科大学院が入っている。試験制度も建物も変わってしまい、少し寂しい。

気がつけば地元に根付いた不動産屋に

ところで私が司法試験の勉強をしていた頃、日本はバブル経済の真ただ中であつた。ある日、神田の私の家に、付き合いのなかった都市銀行が突然不動産業者を連れて来て、隣と合わせた3軒を坪4000万円で買いますと言ってきた。母に店を任せて、自分は不動産屋ごっこをしていた父は、すぐその話に乗り、家族そろって代替地探しをすることになった。

受験が長くなり勉強に少し飽きていた私は物件情報をたくさん取り寄せて、週に何件か見に行くことを始めた。府中市の物件に決めて建築プランの打ち合わせまでしていたのだが、そのうちに湾岸戦争がはじまりバブルがはじけ、買うと言っていた会社がごめんなさいと言ってきた。その後は値段を下げてでも結局売れず、この話は消えた。

そんな中、勉強にすっかり疲れてしまった私は仕事をしようと思い、司法書士を開業するか、不動産屋を始めるか考えた。父が代表の会社は、「ごっこ」ばかりで実際の仕事にはなっていなかったものの、不動産業の免許をもっていた。この際それを稼働させれば家族皆が関われるのではと考え、

俺がやるからまちの不動産屋になろうよと提案し、そうすることにした。体がきつくてラーメン屋をやめたがついていた母親は、喜んで「不動産屋のおばさん」になってくれた。

こうしてラーメン屋だったスペースを改装し不動産の店が誕生した。平成8年だった。バブルで、そこに住みながら商売をしていた豆腐屋、お菓子屋、パン屋、八百屋、ふとん屋はすべてなくなり、その跡には事務所ビルが建って、まちから人が消えていた。不動産屋を始めた当初、管理案件などはなく、事務所や駐車場の客付け仲介がほとんどだった。駐車場を探してくれと言われても当時の情報システムでは出てこないの、現場を自転車でぐるぐる回り、空き地の所有者にあたるなどしていた。その所有者が地元の人だと話が合い、他の案件を紹介してくれた。そうしているうちにほんの少しずつ管理案件が増えてきた。

今ではほとんどが元付仲介（物件のオーナー側にたつて仲介する）だ。始めの頃は、仲介さえさせてもらえれば……という考えで、管理料等はもらわずサービスでしていたが、最近は少ないながらもきちんと管理料を頂戴し、それが会社の大切な基礎収益となっている。

大学を卒業するとき、もし信託銀行に受かっていたらどんな人生だったろうか。勉強をされていて普通の人より仕事を始めるのが遅かったぶん、長く仕事をしようと考えている。実家で仕事をしてきたので、親の介護や町内会の仕事もきちんとできた。地元に根付いているという自覚も持てた。もし信託マンになっていたら、そういう思いは持てなかったような気がする。赤塚不二夫ではないけれど言いたい。「これでいいのだ」



旧 駿河台記念館

寄稿

03 多摩キャンパスと40年 移転決断の責任を 組織も個人も負う

中島 康予（法・法）

キャンパスとの関わりが薄かった頃

1979年4月に法学部に入学した当初は弁護士志望だったものの、学研連の実情を近所に住む先輩からきいたり、司法試験の勉強に最初から集中することは法曹として望ましくないとのアドバイスを父からもらったりで、興味・関心のおもむくまま科目を選択したのが「脱線」の始まりでした。

陶芸部にお試し入部して菊練りと電動ろくろでの成形を経験し、それなりに筋がよかったのではないかと自負していたものの、陶芸部での活動を続けていては終バスに間に合わないという厳しい現実。その一方で、両親が入退院を繰り返すことになったという事情もあり、往復4時間かけて通学していた学部生としての多摩キャンパスは、効率的に単位修得をするためだけに通った場所にすぎません。

卒業式ではじめて自覚的に聴いた校歌を口パクでやり過ごし、大学院入学後も、さらに文字通りありがたいことに法学部に助手として拾っていただいたあとも、大学やキャンパスとの関係はきわめて個人的なものにとどまっていました。

補佐修行が「教員行政職」の原点

それが大きく変化したのは、2003年に学部長補佐をお引き受けしてからです。2000年代に入る前は、学部長とその

非公式サポーター、「ボス」によって学部、ひいては大学・教学の運営が行われていました。しかし、学部長が担う業務量が増え、その内容も複雑化・高度化しており、公式の補佐体制を整えていくことになり、私にお鉢がまわってきました。なかでも重要な修行の場となったのが入学試験の合否判定です。入試は大学の一丁目一番地。そこから、学部・学科、大学、また「業界」の全体がみえるようになり、戦略・戦術を教職協働で合議の上、策定・執行していきます。4年間の補佐修行が私の教員行政職としての原点となりました。

その後、附属の学校における入試をめぐる理事会が混乱をきわめている中、法学部長に就任しました。それまで法学部長には助手出身で法律学の専門科目担当者が就くのが慣習でした。私の前任者が助手出身ではない最初の学部長で、私は政治学専攻初の学部長。私の後任も政治学専攻でしたので、この時期、法学部の運営に変化がおとずれたと言えるでしょうか。一応、女性初の法学部長というストーリーもあるのですが、そこはあまりフォーカスされなかったように思います。

都心移転は「時代との闘い」

法学部長として参画したのが、中長期事業計画 Chuo Vision2025 の策定です。法学部を第一候補とする都心キャンパスへの文系学部の移転が盛り込まれたことは周知の通りですが、移転の必要性のエビデンスは、補佐時代を含めて10年以上携わった入試の合否作業、入学後の学生の成績などの量的・質的データが中心で、エビデンスに基づく政策策定の実例だと考えています。

都心移転への反対論・消極論の一つが、移転が課外活動に及ぼす悪影響でした。それは杞憂と切って捨てるわけにはいかないものの、多摩キャンパスで課外活動ができ、そこにも魅力を感じて選んでくれる学生に限った話です。東京都に立地しているにもかかわらず、都心に集積されているさまざまなリソースを活用するには、通学とは別に時間とお金を割かなければなりません。他大学の学生との交流でさまざまな刺激を得る機会も乏しくなります。広大な大学らしい大学キャンパスのなかで、法学部が現定員のまま、学生の質を維持・向上させるのが至難の技であるのは明らかでした。

ただ、移転推進に、私個人の多摩キャンパス経験が影響していなかったかという点、それは嘘になります。移転は大きな選択です。組織として、決断の責任を今後負うことになっていくと思います。退職まで数年となった教員の領分はどのようなものなのか、考えていくことになりそうです。



2023年にオープンした茗荷谷キャンパス

寄稿 友人の質問に答えて書いた

04 私の卒業後40年

竹島 恭治（理・管）

58 会事務局の中川順一君から、「君の卒業後 40 年について何か書いてくれ」と言われた。何が知りたいのかと聞いたら「質問」を送ってくれたので、それに沿って書いてみた。文学部出身の彼は、後楽園の理工学部のことには知らないもので、そのあたりも少し触れた。

東芝の推薦を貰うのは大変だったが
勉強も遊びも一生懸命やった

【質問 1】1980 年当時の理系大学生が志望する企業のベスト 3 は、日立・東芝・NEC だったと言います。そのうちの 1 社、東芝に就職した竹島さんの志望動機、就活や学生生活について教えてください。

私が中大理工の管理工学科に入学したのは、製造業で経営工学を駆使して経営に貢献したかったからです。他大学では経営工学科やシステム工学科とも呼ばれる管理工学科では、数理統計学・生産管理・品質管理・工程管理・人間工学・情報処理などを学びます。

入学当時（1979 年）の日本は、成田空港が開港、東北・上越新幹線や本州四国連絡道路は着工、大型発電プラントの工事進むなど、社会インフラ事業の全盛期。半導体産業もアメリカを凌ぐまでに成長していました。オフィスにおいては、ようやく NEC が 8 ビットパソコン「PC-8001」を発売したり、自動車電話サービスが始まったりといった年でした。そのような世の中の状況を鑑みて、おぼろげながら電気・電子業界を希望していました。

大学 2 年の春に、学校推薦基準の成績目標値と推薦枠数を知ったのです。電気・電子メーカーの推薦枠が多かったことに背中を押され、入学時におぼろげながらに思っていた電気・電子業界への就職が、自分の中で具体化していきました。

電気・電子業界に決めたのは「今の成績で頑張れば推薦が貰える」と思ったから。会社選びについては、消去法からスタートしました。ソニーやキャノンは推薦枠がなく、私自身も興味がありませんでした。入社後の可能性を考えると総合電機が良いと思ったものの、関西に苦手意識があったので、松下や三菱などの関西系は除外。宇宙や通信系への興味が薄かったので NEC も候補外になりました。日立はガチガチに



大学 4 年時部室での写真。この当時体重 58Kgs。今は、1 桁目と 2 桁目の数字が逆転していて、妻が「詐欺」云々と言います。今号の表紙の集合写真、前列右から 2 人目が現在の私。

堅いというイメージから除外。

そのようにして残ったのが東芝でした。当時の東芝は、70 年代に世界初のインバータエアコン、日本初のワープロ、日本初の MRI、100mw クラスの発電機器開発と現在でも社会の役に立っている新製品を立て続けに開発していました。それもあって、技術力が高い会社というイメージがありました。

「なんとなくスマートな会社だなあ」という思いも抱いていました。ちなみに、銀座のサラリーマンを謳った歌として有名な、藤山一郎の『青い背広で』のモデルは東芝であるということを知りました。

ついでに学生時代のことを書くと、東芝の推薦を貰うのは結構高い成績目標でしたが、プライベートや遊びにも一生懸命でした。毎週月曜日の午前中が専門科目の実験、次の月曜日がレポート提出日だったので、土日はほぼ徹夜。月曜日の午後 5 時頃からは新宿歌舞伎町の居酒屋で、男女 10 人程度で定例お疲れさん会という流れでした。その他の専門教科は週 2 回程度のレポート提出で、これも半徹でした。

遊びに関しては、大学 1 年時には月に 2 回程度、女子大生と合コンしたり、ディスコでナンパしたり、早稲田あたりの雀荘で徹マンをしたりしていました。

バイトにも真面目に取り組み、大学 3 年時からは家庭教師一本に絞りました。この当時の時給は 3,000 円だったので、週 2 回・1 回 2 時間で月 48,000 円になりました。

輸出業務を振り出しに多くの海外出張
新規事業等での会社貢献に自負

【質問 2】私たちの就職後 40 年の間には、バブル経済やその崩壊、失われた 10 年や IT バブル、リーマンショックなど、社会・経済でさまざまなことが起きました。その時代の竹島

さんの会社生活、そしてプライベートはどのようなこと、思い出がありますか。

東芝に入社したのが1983年で、翌年の1984年に東京芝浦電気株式会社から株式会社東芝に社名が変更になり、本社も日比谷の電電ビルから浜松町の東芝ビルに移転しました。

最初の配属先は生産技術推進部物的流通部海外運輸部第三運輸課。国際事業部の輸出案件に関する事前準備、スケジュール、船舶・航空機のスペース予約、輸出通関に必要な書類の作成、輸入者へのスケジュール連絡といった、国際物流と貿易実務です。月100～150件もの案件を専門業者と連携してこなしました。

1993年から物流システム部ロジスティクス推進担当となり、グローバルロジスティクスコンセプトのまとめ、グループ内啓蒙と実践に携わりました。これらは、管理工学における生産管理、工程管理の世界です。

2000年から生産企画部にて、モノづくりに係るグループ生産方針・戦略の立案と実現に向けた仕組み作りをしました。生産企画部の業務は、社長以下執行役員に対して生産分野での提言の実施。事業体に対しては黒幕に徹して、コーポレートとカンパニーの良い関係を構築するのがミッションのひとつでした。また、世にいう「6σ（シックスシグマ）」のMI2001 全社経営変革運動では、数理統計学と工程管理 / PERT をフル活用し、コーポレートスタッフ部門で第一期シックスシグマエキスパートに認定されました。MI2001 運動と連携して、製造現場改善リーダー育成のためのIEインストラクター教育の立ち上げと活性化策を策定、5年間で約200名の認定も成し遂げました。

2011年から拠点最適化推進部にて、コーポレート社長特命の有期限組織である、生産拠点最適化推進担当となりました。



6σのライセンス認定書。東芝でも認定書は紙なのですが、6σだけは気合が入っていたのか、こんな立派な盾なのです。

た。ここでは、事業の変遷・M&A等で不活性になった生産拠点の整理・キャッシュ化、新規事業等での活用を実施。2年半で数百億円の効果をあげました。

2015年からは、東芝グループコンサル会社であるEBSS（東芝グループ、アクセンチュア、日本オラクル出資）にて、IT・業務改善コンサルを実施しました。

海外出張も多かったのも、その頃の思い出を少し。1987年9月にFAT（Final assembly and test）工場立ち上げのために2週間、ロサンゼルスに行ったのが初めての海外出張でした。東芝がラップトップPCを立ち上げ商品化したのが1985年。絶好調のさなか1987年7月にアメリカ政府の制裁により、パソコンの関税が100%となってしまいます。いわゆる日米半導体摩擦ですね。そこで、急遽ロサンゼルスにある現地法人の倉庫でFAT生産を行うことになり、その立ち上げ支援と、識字率の低いワーカーに対応したFAT部品供給の仕組み構築を任せられました。

1988年にはODA案件で2週間、ネパールに出張しました。ネパールでは、国営放送局がラジオネットワークの最後のキー放送局を西地域に計画しており、兼松・東芝・清水のJVでODA案件を受注しました。ネパール西値域は輸送網が整備されておらず、どのようにして放送設備を輸送するかを検討するためのRoad Surveyが私の業務でした。サイトはセスナしか離着陸できない田舎の空港から歩いて3時間、泊まれるような家や設備は一切なく、外壁だけある建物の中で寝袋に入って野宿。当時は実費精算なので清算は当然ゼロ、食料はカトマンズで手に入れた中国製の袋麺、缶詰とお菓子といった有様でした。

1995年からは、生産の国際化の実践として、グローバル供給拠点となる工場の立ち上げ支援に携わりました。フィリピンと中国の深圳で3,000人～5,000人規模の工場の立ち上げのために、複数回の長期出張をしました。中国では12カ月の間に合計183日を超えてコンサルティング等の役務提供をすると、納税義務が生じます。PE課税（Permanent Establishment：恒久的施設）と呼ばれるルールで、これを回避するために、月に2往復～2.5往復という、結構ハードな出張日程での支援を続けました。

【質問3】かつて多くの学生が憧れ、日本を代表する企業であった東芝は、昔日の面影がない印象があります。それについて竹島さんはどのように思い、考えますか。

東芝のその後については、まだギリギリ東芝グループ内にいるので、第三者的視点では見ることはできませんが、振り返って1990年代の日本は、バブルがはじけ円高が生んだ真の生産の国際化の渦の中にあっただと言えます。日本企業の

生産の国際化は、FAT（部品輸出・製造委託・出荷）→輸送費ボーナスと保護貿易措置を背景とした現地及び近接地生産→人件費ボーナスを背景とした持帰り生産（部品輸出・生産・日本へ持帰り（輸入））→中国を代表とする消費地立地&持帰り生産→地産地消化（ローカル調達・生産・国内出荷と持ち帰り）→複数の生産拠点のグローバル生産分業（ハブ&スポーク）という変遷を経ました。1995年当時の1ドル80円という円高は、想像を超えるもの。この時東芝は約20もの生産現地法人を設立しました。実はこの頃の私は、1994年に長男が重症複合型免疫不全症で他界し、仕事に没頭する日々でした。それは1999年に長女が誕生するまで続きました。（以降今日まで続いているかも……）。

2000年から中期経営計画における生産面の統括をするようになります。その仕事をしてきた立場でみると、ITバブルがはじけた2005年頃から、東芝は変わったと感じています。2000年以降、事業環境が大きく変わっていく中で、巨艦の東芝は上手く舵を切れなかったんですね。量産事業は大きなボラティリティの渦の中で乱高下。半導体・液晶事業は韓国企業と大規模投資の競争が勃発。どちらも事業の集中と選択の中で切り離しとなってしまいました。東芝は、土光敏夫さん、玉置敬三さん以降は内部から社長を輩出してきました。歴代の社長は、先輩の業績に後れを取ることなく事業を継続することが第一義。結果として、それは事業の大きな伸長にはつながらず、さらには、巨艦であるがゆえに舵を切っても効果が出るまでには多くの時間がかかりすぎ、気づいたら手遅れだった、ということなのかもと思います。

東芝は、学生時代に抱いていた「技術力が高い会社」「なんとなくスマートな会社」というイメージどおりの会社でした。そのイメージの背景は、勉強はできるけれど、事業家の視点では頭が良くない、やんちゃではないということです。出身大学は旧帝大、東工大・一橋・お茶の水や早慶上理と煌びやかで、中大も新入社員の5%は占めています。皆お勉強はできるので、社内研修等では質疑応答が止まりません。

ただし「やんちゃ感」は無し。やんちゃをする自信と、そのやんちゃを支える雰囲気ありませんでした。日本初・世界初の製品を商品化しても、爆発的に世に売り出す手段や、開拓した市場を独占する手段がわからない。なぜなら、社内では先輩や上司の背中しか見てこなかったし、そうすることが出世の早道だったからです。起業家精神は出世の妨げになるような雰囲気でした。その企業体質は、現在も変わっていないかもしれません。

俯瞰してみると「日本の縮図に見える東芝」と言えるでしょうか。日本が同じ道を進まないことを希望しますが、政治・経済そして国家の基礎となる労働人口に不安を抱える毎日です。

寄稿

05 「失われた30年」と私 卒業から40年を振り返って 湊崎 俊也（法・法）

はじめに

卒業して早や41年、後2年弱で晴れて(?)高齢者の仲間入りをする年齢になってしまいました。

私自身の経歴は、それ程面白味のあるものではありません。新卒で入行した銀行で大して出世もせず、ただただ社畜に徹することで定年まで生き永らえる一方、30過ぎて結婚して、授かった一男一女の将来を案じるどこにでもいる「昭和の生残り」の一人に過ぎません。ただ入社1年目の下町店店頭（貸金庫窓口）経験を除けば、営業・審査・調査・企画と部署は異なるものの、4度の海外勤務を含めて一貫して海外投融資に関わる業務を担当してきたことは、役所と並んで「ジェネラリスト」の権化である銀行においては、いささか毛色の変った存在だったかもしれません。その結果、海外投融資に係る全プロセスについての一通りの経験に加え、歴史的・地理的な視点に立って鳥瞰してみる目を、曲がりなりにも養うことができたのは大変幸運でした。定年後も同じ会社で専門社員として米国政治/社会ウオッチを含む調査/研究をさせてもらっているのもそのお陰です。

一部の「天才」を除けば、およそ「専門性」と言える程の業務に対する理解は「時間」と「経験」なしには得られません。まして「働き方改革」で勤務時間が大幅に制約される中、キャリア形成上の「一貫性の確保」の効用は、従来よりも遥かに大きいと思います。私の場合、それは多分に「偶然」の所産でしたが、一定規模以上の組織の人材マネジメントにおいて、この点を意識した運用は、もっと組織的になされても良い気がいたします。

同時に若い時期に一定期間濃密な職務体験をすることは、仕事を続ける上で必須の「自信」を得るために極めて有効、というよりも不可欠のプロセスです。もとより昭和流の「激務」を闇雲に推奨する積りはありませんが、「時短・残業なし」を目的化せず、十分な管理の枠組の下、期間を区切って勤務時間の柔軟な運営を許容することはあっても良いのではないのでしょうか。逆に所謂「パワハラ」・あるいはそこまで行かないものの個人の正当な裁量と判断を無暗に押さえつける「指導」ほど、モチベーションを下げるものではありません。むしろそれぞれの力量に応じて狭い範囲でも「オーナーシップ」を体感できるよう明確な責任領域を与えることが肝要だと思うのですが、いかがでしょうか。これについては一度銀

行以外の企業人事の方々ともお話をしてみたいと思います。

最大の試練

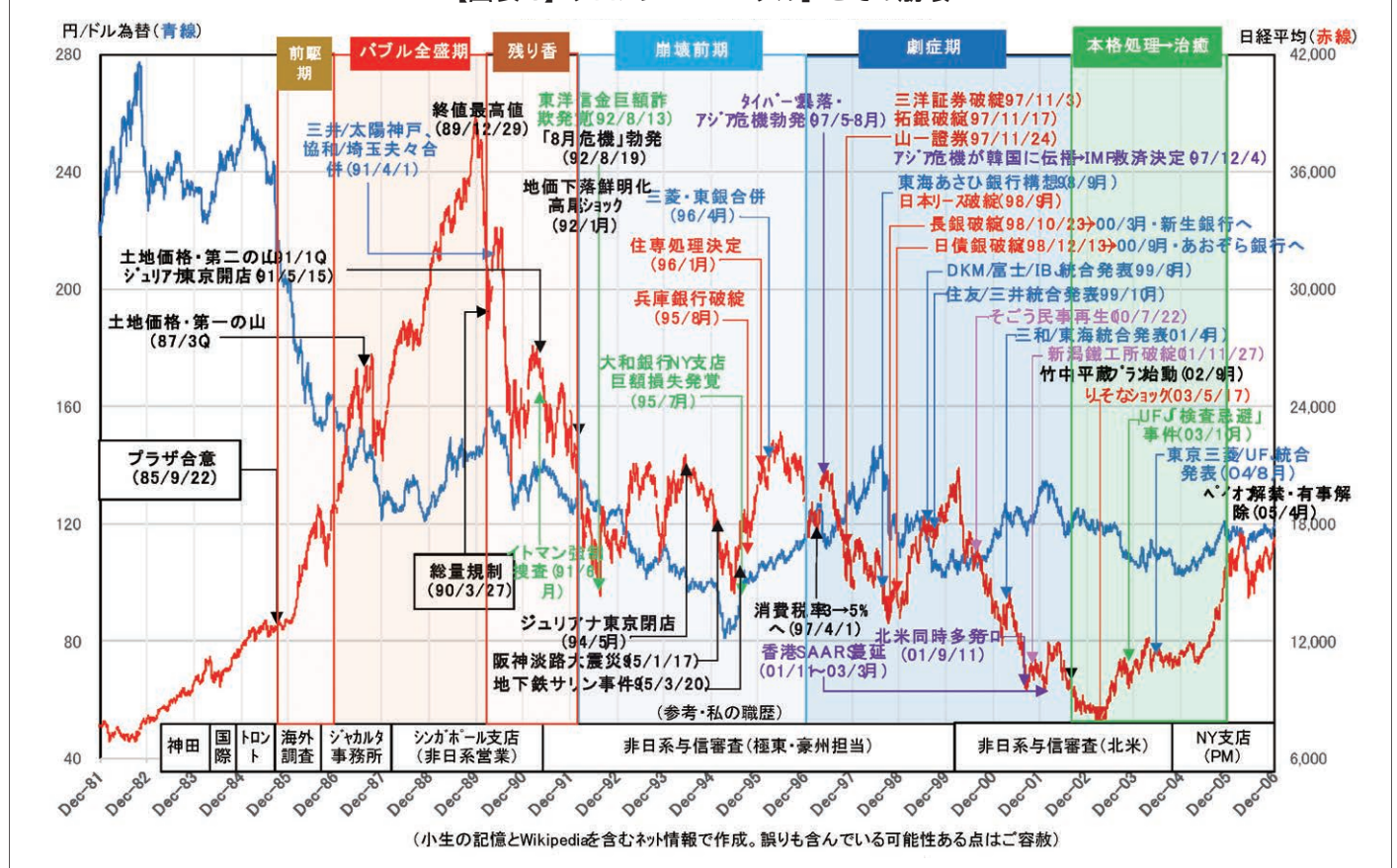
バブルの後始末について

さて、世紀をまたぐ40年間銀行に勤めた、となれば「バブルの後始末」には触れざるを得ません。というより、私個人にとっても「職」と「家族」を失うかどうかの最大の試練の時でした。次頁・(図表1)の通り、1980年代後半から1990年代初頭にかけての時期、私はジャカルタ・シンガポール勤務だったために、「プラザ合意」(1985/9/22)後の急激な円高を背景とした資産バブルの「恩恵」とは公私共にほぼ無縁(円高で美味しいものが食べられた程度)でしたが、同期から漏れ伝え聞いたその実相は凄まじく、「不動産転がし融資」(単一の物件を一か月の間に5回・6回と転がしその都度融資を行って融資と売買仲介の手数料を稼ぐ、というもの)しかり、「利益保証(?)融資」(課長レベルの「覚書」で一定の利回り確保をほのめかして証券投資のバックファイナンスを行うもの)しかり、耳と疑うものばかりでした。その後「総量規制」(1990/3/27)を契機に不動産バブルがはじけ、株安も相まって「不良資産」が徐々に銀行を蝕んでいっ

たものの、その処理は遅々として進まないどころか、金利分の追い貸し等で巨大化・山一／三洋証券ショック(1997/11)を契機に、拓銀・さらには長銀の破綻へと突き進んだことは皆さんもご存じの通りです。

この時期になると、海外非日系と信審査担当の私もその処理にどっぷり漬かることになります。日々悪化する外貨調達環境の中、何とか運調バランスを維持すべく、優良ローンを担保にヘッジファンドから屈辱的な高利で資金導入を図ったり、それでも足りない部分は市場でローンを売却したりと、およそ審査らしからぬ「後始末」に狂奔しておりました。しかも間の悪いことにタイ・バーツ暴落(1997/5-7月)に端を発したアジア危機は、頼みの綱である大手邦銀の外貨調達難も相まって瞬間に東南アジア・そして韓国へと伝播、非日系と信ポートフォリオもリスク・リストラの嵐に巻き込まれます。銀行存続のためには「一定水準の自己資本」の維持が不可欠です。そのためにはにわかに厳格化した金融庁の資産査定で自らの融資ポートフォリオの健全性を証明し、極力追加引当額を圧縮しなければなりません。要するに「半沢直樹」の世界です。検査自体は臨時も含め年1回程度のペースですが、抜き打ちで通告を受けた後はほぼ不眠不休で「ラインシート」その他の資料整備を行う必要があり、店部説明を受けての本

【図表1】クロノジー・「バブル」とその崩壊



部復活折衝、二段表・三段表と言われる「反省文」の作成等その負担は膨大です。しかも銀行の存続が掛っているとすれば、経営からのプレッシャーは凄まじく、とりわけ国内ノンバンク・不動産担当の審査役の中にはその板挟みで体調を崩した人、激務の果てに家族を失った人は少なくなく、退職を余儀なくされる人すら1人2人ではありませんでした。「りそなショック」（政府による強制資本注入・2003/5/17）を分水嶺に徐々に「正常化」に向かい、2005/4月の「ペイオフ解禁」を以て一応終焉しましたが、この時の「トラウマ」は恐らく同時代に銀行員を経験した人であれば皆等しく共有していることと思います。

もちろん、世紀末・金融大動乱の「とぼっち」でそれ以上の辛酸を舐めさせられた融資先企業とそこで働く人々からすれば、その際の「銀行員の苦悩」など自業自得と映ったことでしょう。私自身も銀行の不良資産問題が毎日喧伝されていた時代は、同窓を含め、世間からの「冷たい目線」をしばしば感じていましたし、それは家族も同様です。90年代初頭の問題発覚から6年以上の長きに亘って糊塗策に終始して不良資産の抜本的処理を逡巡してきた金融機関の責任が重いことは言うまでもありません。まして「バブル」全盛期の金融機関の「やりたい放題」には目に余るものがあります。あるいはそれ以前の問題として、メインバンク制にあぐらをかいた銀行の上から目線・慇懃無礼さが、元々市井の人々からは白眼視されていた、という部分もあるかもしれません。二度とかかる過ちを犯さない、という決意を持ち続けることは、金融機関とその職員の最低限の矜持だと思います。しかし「バブル」期の「やりたい放題」はともかく、その後の処理の遅れを単純に金融当局と経営陣の「保身」に帰するのは、ちょっと違う気がいたします。もちろんそれもあるでしょうが、むしろ本邦経済に占める金融の役割の大きさ故に、どんなに「賞味期限切れ」であっても旧来からある「システム」に触れることに大いなる躊躇いがあったことが対応の遅れに繋がった、とみるのが、フェアな評価ではないでしょうか。だとすれば、FRB・財務省・そして議会（特に上院）一丸となって果敢な処理が行われたリーマンショックでの米国の経験（ちなみに奇しくも私はハイイールドローンのPMとしてその渦中にあり、かかる対応をつぶさに見知っております）は「例外」であり、本邦バブル崩壊という絶好の「教訓」がありながら、その「失敗」をことごとく踏襲しているかにみえる今次・中国不動産バブル崩壊における当局対応の方が、むしろ「自然」だとすら思えてきます。「生産年齢人口の減少」と「農村余剰労働力の払底」（所謂「ルイス転換点」への到達）を2010年代前半、ほぼ同時期に迎える一方、「共産党統治の維持」という至上命題に答えるためにも、それまでの「不動産レンティア国家」とも言うべき社会経済システムを些かも揺るがせに

できない、という中国特有の事情も考えますと、中国が目下の経済停滞を脱するには、本邦以上の気の遠くなるような時間を要する気がしてなりません。

では、本邦を含む先進各国の金融システムはどうでしょうか？ リーマンショック後10年を超える緊縮モードに伴う融資利鞘の縮小で、私の勤務先を含めて大多数の銀行はいずれも自己勘定での「運用」からアセマネ・決済等の「サービス」に収益の軸足を移しています。規制当局の監督強化も相まって、少なくとも資産価値の大幅減価に端を発した「銀行・発」の金融システム崩壊はかつてと比べればよほど反面発生しにくくなっているはずですが、しかし安心はできません。なぜなら「バブルは常に別の顔をして訪れる」、というのが、17世紀の「チューリップバブル」以来の教訓だからです。潜在的な「バブル」発生源として今最も注目されているのは、ヘッジファンド・PE等の「シャドーバンク」勢ですが、それだけが火種になるとは限りませんし、それ以前の問題として、そもそも膨大な富裕層・年金等の運用ニーズがある限り、規制強化で未然にリスクを制御しようにも限界があります。とすれば、重要なのは、僅かな兆候からバブル発生とその波及経路を想定する「想像力」であり、不幸にも一旦事が起こってからの「果敢な対応」ということになるでしょう。もちろん、その行動主体になるのは、政府と金融当局ですが、銀行員を始めとする金融/投資に関わるプロフェッショナルはもちろん、個人もまた市場の一員として、さらには有権者として、責任の一端を担わずにはいられません。折しも日経平均がバブル期の最高値を回復した今、この点をもう一度再確認しておくことは、個人の資産防衛の見地からしても重要なことではないでしょうか。

もう一つのお話— 「小さくなる日本」とどう付き合っていくか？

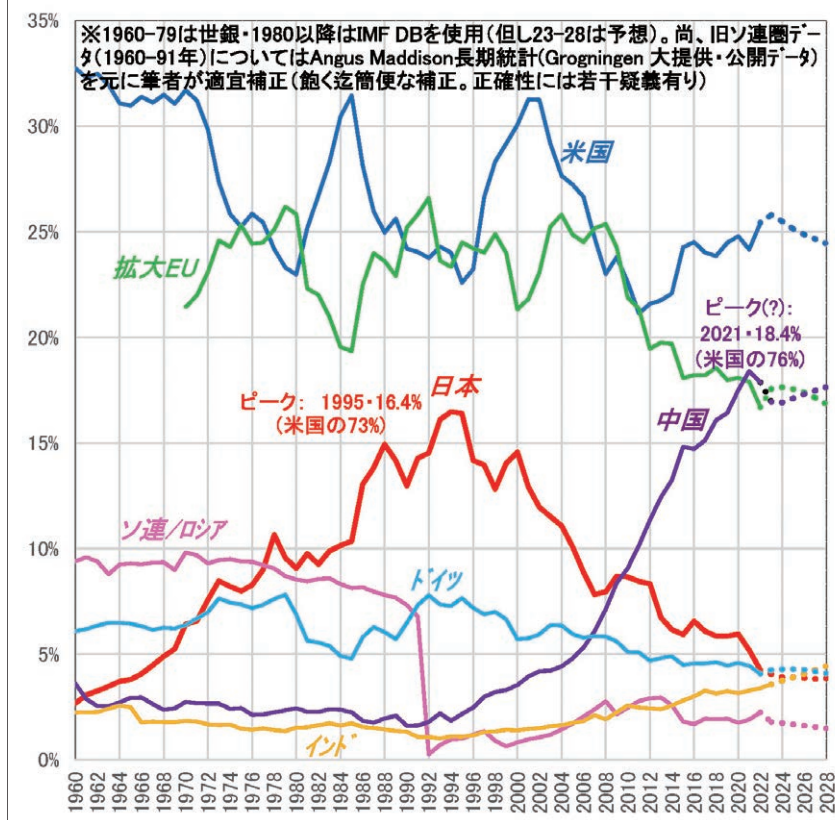
一方、4度の海外駐在を含め一貫して海外関連の投融資に関わってきた身として痛感しているのは、世界経済に占める日本のプレゼンスの「栄枯盛衰」、とりわけバブル崩壊後の著しい「凋落」ぶりです。これは名目GDPでみた主要国の世界シェアの推移（図表2）を觀れば一目瞭然です。すなわち、1960年の日本のシェアは2.6%、それが私の入社した1983年には9.8%、バブル絶頂期の1989年には15%に躍進、その後も勢いは止まらず1995年には16.4%のピークを記録したものの、その後続落して2010年には8.7%となり中国（9.1%）に抜かれ、今や4%割れ目前にまで追い込まれています。既に昨年来報道されているように2023年にはドイツに、さらに2024年にはインドにも抜かれることがどうやら避けられない模様で、これを觀る限り、その状況は目を覆うばかりです。

もちろん、これは「為替のマジック」によるところも大きいとは思いますが。1990年代半ばの「対米比73%」がどう考えても過剰であると同様、2023年の「対米比1／8」もまた、「過小」に過ぎるとは思いますが。しかし購買力平価ベースの世界シェアでみても、中印その他新興国の急激な台頭で旧来の先進国が割を食う中でも、イタリアを除く欧州各国が依然1990年時点の6割台を保っている（ちなみに米国は73%でそれよりも元気が良い）のに対して、本邦は4割強まで落ち込んでいます（図表3）。実際の経済現場の実情はもっとシビアで、例えば1990年当時世界でこのかきこで見た本邦家電ブランドを今日探すことは難しいし、本邦主要業種で国を跨るエコシステムが未だに健在なのは、極論すれば自動車関連だけ、というのが現実です。とりわけ東南アジアではそれまで本邦のプレゼンスが高かっただけに、往時を知っている者からみればその凋落ぶりに

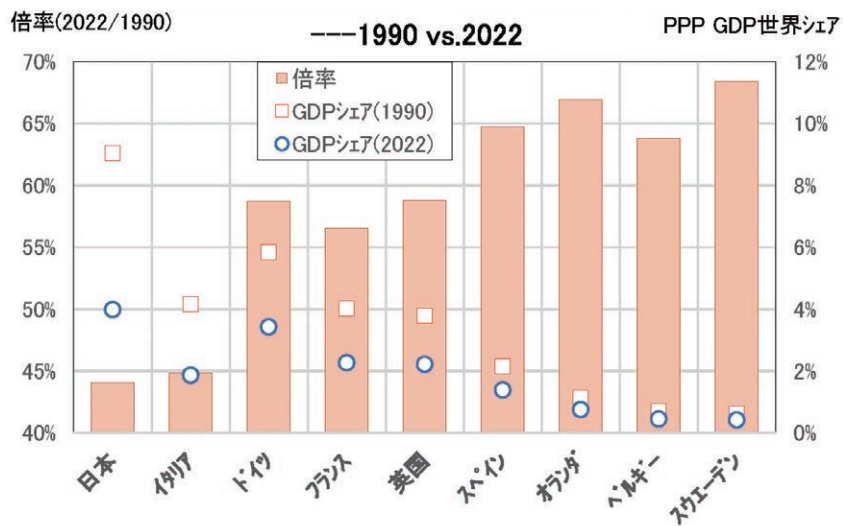
は慨嘆を禁じ得ません。問題は、かかる「栄枯盛衰」が世界史的にみても類例のない短期間で生じたために、未だに経営層を含めて一種の「認知の歪み」が生じていることです。流石に最早「Japan as No.1」の迷妄を信じている人はいないと思いますが、未だその凋落ぶりを現実として正しく受け入れられずに、各種陰謀論やら最良の引き倒しのような外国人の日本礼賛に縋って「日本凄い！」論に傾斜しているのがその典型です。あるいはその逆に、極端な悲観論に走る余り、ことさら日本の実力を貶し、外国礼賛の「出羽の守」的言説に耽る人もいますが、両者は結局同根です。

実際には日本は依然として世界の主要経済国の一つであり、恐らく今後も相当期間そうであり続ける可能性が高いものの、しかし単独で世界経済を動かせるようなパワーは最早ない、というのが、正しい認識です。それを出発点として、国も企業も戦略を建てる必要があることは、自明の理のはずです。その意味では、「自国通貨ベースでの生産年齢人口一人当りの実質経済成長実績でみると、主要先進国中日本のそれは最も高い」というクルーグマン博士の指摘（図表4）は、日本経済の意外な底力を示すものとして、心強く感じます。しかし同時にそれは、「海外」を実際に知らない日本人／企業

【図表2】名目 GDP・主要国の世界シェア推移



【図表3】日欧主要国の購買力平価 GDP の世界シェア



が自らの境遇に「自足」してしまっていて、さらに世界から取り残されてしまう危険性をも孕んでいるような気がしてなりません。とりわけ危険なのは、「世界標準」からかけ離れた「安売り指向」の構造化です。昨今の「円安」でまたぞろ「インバウンド」による「稼ぎ」への期待が高まっていますが、もしそれによって本源的な財・サービスの「単価引上げ」に向けた努力が阻害されてしまえば、長期的にみればむしろマイナス

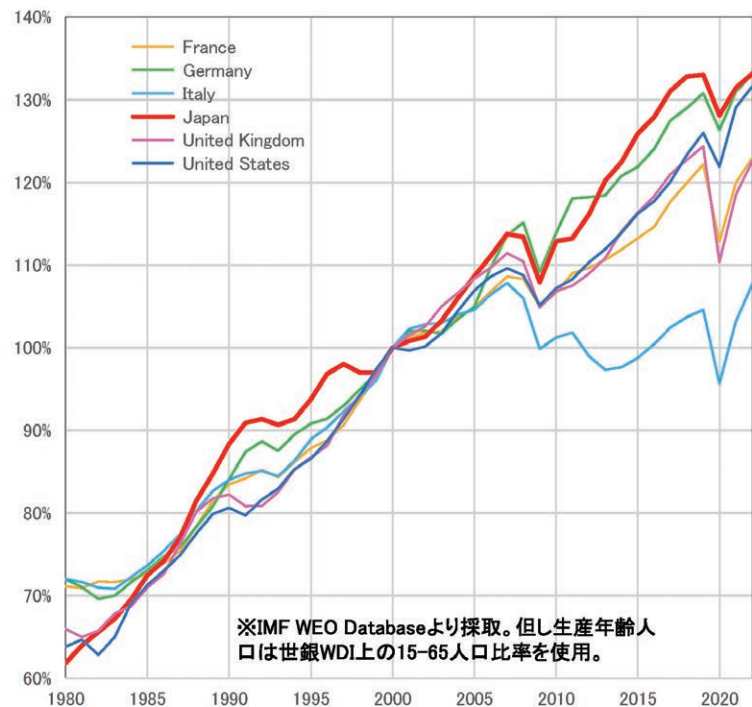
です。内外を問わず、「為替」に翻弄されることなく安定的に稼げる「売値の設定」ができるように努めること、つまりは「安売り」を断固として拒絶する「マインド」の徹底が、容赦なく進行する少子高齢化の中で、世界に占める日本のプレゼンスを確保してゆく上では最も肝要なのではないでしょうか。

もちろん、言うは易く行は難し、です。今の「お得」全盛の背景には、過剰とも言える「雇用絶対主義」と並んで、インフレに対してことのほか脆弱な給付依存の高齢人口比率の増大があります。欧米と比べれば遥かに低水準に留まっている（図表5）にも拘わらず、パンデミック後の「インフレ」にこれ程社会的な抵抗が強いのもその表れでしょう。あるいは「バブル崩壊」とその後のバランスシート調整による設備投資の低迷が引き起こしたと一般には認識されている空前のデフレスパイラルも、その原因の一端はこれら社会的な構造にある、と私は睨んでいます。かかる状況を覆すには、前述の通り社会全体の「マインド」を変えるしかありませんが、先ずは若い人々がその尖兵になる必要があります。即ちなるべく多くの若い人々が海外を経験することで、「世界標準」でのモノとサービスの適正な価値を知り、それを実際のビジネスにも生かしてゆくことです。もちろんそうなれば、ポスト・パンデミック期の輸入物価修正が一段落した後も、物価上昇は続いてゆくでしょう。年金生活目前の私たちにとっては余りありがたくない状況です。しかしこのまま「低収入→低物価」の「お得」地獄に経済全体が陥り続けるよりは、余程将来性は高いのではないのでしょうか。であれば、多少の労苦は甘んじて受入れ、「変化」を妨害しないことが、むしろ高齢者にとっても望ましい身の処し方である――少なくとも私はそう思っていますが、さて、同期同窓の皆さんはどうお考えでしょうか。

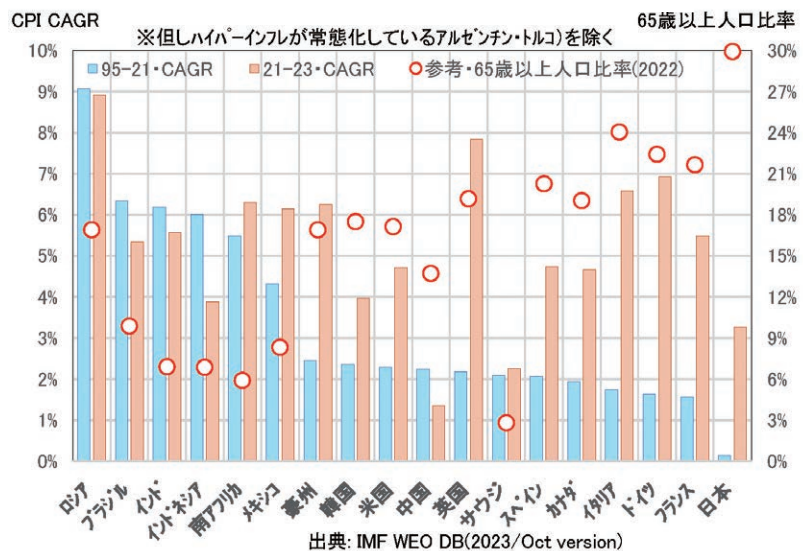
おわりに

ともあれ、契約社員としてのお勤めも早晚終了です。「もしトラ」が「ほぼトラ」に変わりつつある中、米国政治ウオッチャーとしては、恐らくそれを最後まで現場で見届けることができないであろうことは心残りではあります。しかしいつまでも「昭

【図表4】生産年齢人口1人あたり実績 GDP (2000 = 100%)



【図表5】G20 各国・物価上昇率の状況



和の残り香」を漂わせた年寄りが居座っても良いことはありません。これからはなるべく「口」を出さずに、文字通りの「労力」を提供することで、後進に報いたいと思っております。そのためにも、そしてこれから厳しくなるであろう健保の負担を少しでも減らすためにも、何より健康で過ごしたいと願っています（といいつつ酒もだばこもまだ止められないのですが……）

皆さんのこれからの素晴らしい日々を心からお祈り申し上げます。

寄稿 卒業 40 年 06 来し方「弁護士」、 行く末は？

小宮山 澄枝（法・法）

多忙だった「失われた 10 年」

私は現在、東京都中央区内にささやかな個人事務所を設けて、弁護士業務に携わっています。今般は、ご縁があって、この会報に投稿させていただくこととなりました。「卒業後 40 年」がテーマと伺い、まさに気の遠くなるような年月が過ぎ去ったのだなあと、しみじみ感じています。

卒業の翌年である 1984 年（昭和 59 年）、幸運にも司法試験に合格（注 1）し、司法研修所 39 期として 2 年間の修習を経て、1987 年（昭和 62 年）4 月に弁護士登録をしました。

1987 年は、後年の研究によると、いわゆる「バブル景気」が水面下で始まった時期でしたが、まだまだ駆け出しに過ぎない身でしたので、バブル景気による恩恵も、あるいは逆に、その被害も受けずに済みました。しかし、入所先が金融法務を多く取り扱う法律事務所であったため、1991 年（平成 3 年）のバブル崩壊後に続いた金融危機の際には、破綻した金融機関の処理に関する業務など、先例のほぼ無い稀有な作業に取り組み、多忙を極める毎日を過ごしました。

社会全体では、後に「失われた 10 年」と呼ばれる長期不況に喘ぐ時期でしたが、一人の職業人としては、やりがいと面白味のある仕事に従事できた、非常に充実した時期であったと思っています。

他方、私生活では、1991 年（平成 3 年）に第 1 子である息子を出産し、3 年後には娘も誕生したので、1990 年代は仕事に加えて子育てにも追われる、まさに「てんてこ舞い」の時代でした。

ちなみに、そのことを如実に感じるのは、TV 等で「〇年代のヒット曲特集!」という類の番組を観たときです。1980 年代までのヒット曲は、それなりに聞き覚えがあるのですが、1990 年代に入った途端、見事に知らない曲ばかり。唯一知っているのは、子ども達も喜んで聴いていた「だんご三兄弟」だけという、情けない状態でした。

子育てもまた、非常に手応えのある、家庭人としての仕事であり、子ども達の成長を見守るのは、大きな喜びでしたので、親としても恵まれた日々であったと思います。しかし、当時の流行歌の一つも記憶に無いというのは、純然たる個人としては、これもある意味、「失われた 10 年」であったと言えるの

かもしれません。

2000 年代に入ると、司法制度改革の流れが加速して、弁護士業界にも良くも悪くも様々な変化の波が押し寄せて来ました。私自身は 40 代を迎えて「いつ死んでも不思議ではない年齢になってしまった。仕事なんかしている場合ではない」という思いに駆られ、それまで「やり損ねていたこと」の実行に精を出すようになりました。はじめに実行したのが、子ども 2 人を連れて（夫は日本に置いて）の米国ロースクールへの留学と、現在の個人事務所の開設でした。

最大の「やり残し」への挑戦

留学も事務所開設も、40 歳を超えたオバサンの「遅ればせながらの挑戦」でしたが、極めつけはシャンソンの歌手としてのライブ活動開始です。

私は高校・大学時代に、いわゆるフォーク・ロック・バンドでヴォーカルとして活動する一方で、シャンソン（フランスの歌謡曲）にも惹かれていました。司法試験の受験時代も、シャンソニエ（シャンソン系ライブハウス）の伝説的な名店である、今は無き「銀巴里」に時折り出掛けては、同店のオーディションを受けてステージに立つことを夢見ていました。

しかし、弁護士になってからは、仕事と育児でフル回転の生活に追われ、そんな夢を叶えることはないまま、同店は閉店。私自身も歌うことから離れて 20 年以上を過ごしていましたが、2010 年（平成 22 年）にシャンソンの勉強を再開し、2012 年（平成 24 年）からはシャンソニエに出演して、歌わせていただくようになりました（注 2）。齢半世紀を迎えようとしていた頃、かつてのバンド仲間の言葉をきっかけに、私にとっての「やり残している最大のこと」「やらずに死んだら間違いなく悔やむこと」は、歌うことであったと思い至ったからです。

シャンソニエには、従前は月 3 ～ 4 回、コロナ禍を経て現



1987 年 5 月、片岡義広法律事務所（現 片岡総合法律事務所）にて撮影

在は、月1～2回程度の出演を続けています。コロナ前から年1～2回のソロ・ライブも開催していましたが、コロナによって会場に出向いていただくことが難しいお客様が生まれました。そこで、2021年(令和3年)初めにYouTubeチャンネルを開設し、ソロ・ライブでの歌唱をアップするようになりました(注3)。

シャンソニエで歌わせていただくようになって満10年を迎えた2022年(令和4年)には、10周年記念として、内幸町ホールで初めてのソロ・コンサートを開催しました(注4)。コンサートの第1部は、事務所にいる私が電話で法律相談を受けながら、突然それに関連する曲を歌い出す、という芝居仕立て

の構成にしました。それが「面白い!」と好評であったため、気を良くして本年4月にも、同じく内幸町ホールでのソロ・コンサートの開催を予定しています。

まさに酔狂の極みに他なりません、子ども2人を無事に社会に送り出し、「前期高齢者」のお墨付きを目前とする身になりましたので、「後は野となれ山となれ、行く末歌手なら文句はない」という気持ちでいます。これからも降圧剤を服用し、膝の痛みに耐えながら、何とかもうしばらく歌い続けたいと思っています。白門58会の皆様、もしご興味を持ってくださいましたら、ぜひ一度、ライブ等にお出かけください。

楽しみにご来場をお待ちしております!

(注1) 司法試験の合格時、中央大学の「ちゅうおうMyCampus」という広報誌に、「勉強の季節を迎えようとしている皆さんへ」のタイトルで合格体験記を掲載していただきました。古いものですが、ご興味があれば、末尾の連絡先にご一報ください。

(注2) ライブ活動を始めた経緯等については、金融法務事情2019年11月10日号(No.2125)に、法務エッセイON & OFF「兼業『シャンソン歌手』のご挨拶」のタイトルでエッセイを掲載していただきました。ご興味があれば、末尾の連絡先にご一報ください。

(注3) YouTubeチャンネル「komikomi座」をご視聴ください。「小宮山澄枝 シャンソン」でも検索していただけます。

(注4) 10周年記念コンサートの全編通し動画も、「komikomi座」にアップしています。「小宮山澄枝 10周年」でも検索していただけます。

小宮山澄枝さんのコンサート

小宮山さんの内幸町ホールでのソロ・コンサートは、4月27日(土)に「100曲超えチャレンジ・ライブ第1弾」として開催されます。ご予約お申込みは、掲載チラシ記載のお問合せ先か、以下の連絡先まで。

【連絡先】小宮山澄枝法律事務所

電話: 03-3552-5880

FAX: 03-3552-5881

E-mail: attorney@komi-law.com



第1弾
100曲超えチャレンジ・ライブ
2024年4月27日(土)
会場: 内幸町ホール 開場15時 開演15時30分
出演 小宮山 澄枝

ピアノ 野秋聖子
ヴァイオリン 吉久重紀
ベース 山口じゅん
パーカッション 牛田悠貴

3,900円(自由席)
《ご予約・お問合せ》 小宮山澄枝
Tel: 03-3552-5880
Fax: 03-3552-5881
✉ attorney@komi-law.com

演出 嶋本 秀朗 音響 義藤雅志
照明 川原 敬貴 舞台監督 星雅裕

100曲超えチャレンジ・ライブ (全6回)
第2弾 2024年8月17日(土) 蟻ん子 第3弾 2024年12月1日(日) 池之端Qui 第4弾~第6弾 2025年(詳細未定)

都営三田線 内幸町駅
内幸町ホール(B1F)
東京都千代田区千代田1-5-1
Tel: 03-3500-5578

JR新橋駅
都営浅草線 新橋駅

寄稿

卒業 40 年 07 レゾンデートルという言葉

米山 真澄（商・経）

卒業 40 年の思い出を整理すると、前半は、20 歳で入会した（丁度地元で創立）した（JC＝青年会議所）の思い出。後半は、42 歳で市議会議員になろうと思い立ち、現在（6 期目）に至る政治の仕事。そしてもう一つの仕事は印刷会社の仕事。10 歳の時に父の起業した会社を、30 歳になって株式会社にする時、代表取締役となりました。小中高校と放課後にお手伝いをしてたので凡そ承継が約束されていました。

よく大学 4 年間は“時間をお金で買った”と喻えますが、あの自由時間が、その後、私が自営業、自由業を選択した要因になったのかもしれない。

そもそも自分のアイデンティティは「カトリック幼年洗礼」にあり、どこかで人の役に立ちたいという使命感（ミッション）がありました。高校時代の奉仕団体青少年赤十字（JRC）の活動、地域活動の JC、子どもができた後に関わった PTA でも、その気持ちがありました。その分家庭・家族への時間が減ってしまったのは確かであります。

家庭・家族については、学生時代、硬式テニスサークル「マルボロ」に在籍したことが家内と知り合うキッカケになります。そのことに感謝しています。ゼミでお世話になった岩尾裕純先生には、「米山が卒業してすぐやることは、嫁さんを見つけること!」と言い切られました。埼玉の田舎の零細企業に嫁ぐ女性の確率を考えてのご指導と深く感謝申し上げます。

ゼミで研究した P.ドラッカーの言葉に「企業の仕事は 2 種類の顧客を創造する!」というのがありました。カスタマーと従業員、どちらからも選んでもらえる会社にすること。翻っ

て、政治家が求めるものは、ニーズ（政策）と支援者ということになるでしょうか。

高校時代の JRC の“誓い”は、心身を強健にし、地域から世界・地球までの必要性を捜し、解決のためにいい方向に導くことだと理解していました。「全ての結果には原因がある、だから“原因づくり”を意識しよう」とは、JC の研修会で教わった言葉です。「人を変えることはできない。変えられるのは自分」だから“自分が源”としてまわりを少しでも明るくできることを考え、行動するようにしてきました。

逆にこんな言葉も教わりました。「断る権利は相手にある。だから遠慮なく頼め!さらに、人からお願いされて悪い気持ちになる人は居ない。なぜなら、その人の価値に気付いて、見出しで頼んでいるんだから」これは、家庭、職場、地域活動全てに共通するゴールデンワードです。折角の機会ですから、同期の皆さんにプレゼントいたします。ただし、お願いして、してもらったことには、感謝、報告を怠ってはいけません。物品は伴わなくていいんです。ひと言ありがとう!メールでも手紙でも……。ある高校の先生が生徒に贈る挨拶文に、「必要な社会での力は努力とともに『感謝力』とありました。成功している、成功した人の言葉には必ず感謝の心が表れていることを引き合いに出されていました。お願い同様、感謝されて、嫌な気持ちになる人は居ませんね。

つれづれなるままに書いてきましたが、そろそろまとめな

いと。先日、レゾンデートルという言葉が久しぶりに耳にしました。先述したアイデンティティ、存在意義、存在価値に似ています。高校時代は、“人と違う生き方をしてみたい”という思いがありました。今、まさに、誰でもなれない立場に居させてもらえることに感謝しつつ、こんな人間が、この地域に居たんだ。少し変わってる人だったよね…と云われるくらいになれば幸いです。

（白門 58 会設立準備会時代からの初代会長）

内畑 雅年（経）

和歌山白門会の会報に掲載された私の記事です。

＜日日は好日(内畑 雅年 副幹事長)＞

「月日は百代の過客にして行きかふ年もまた旅人なり」卒業してはや40年。大阪での勤務から和歌山の家業に戻り、28歳ごろ和歌山白門会に入会させて頂きました。

当時支部長は県会議員の鈴木先生、幹事長は元応援団長の笠井先輩で、年末の忘年会へは現支部長の二階先生も来られ、大いに盛り上がりしました。最近では近畿の支部会の皆様とも交流が始まり、バスで高野山へお越しいただいたり、支部では総会時に中央大学のPRを兼ねて学術講演会を開催したりと、今はコロナ禍で中断しているこれらの交流もそろそろ元に戻ってくると楽しみにしています。

それとわたしのライフワークになりつつある母校拳法部の大阪での試合応援ですが、昨年12月の全日本学生拳法選手権で中央が12年ぶり優勝、現役選手たちと祝杯をあげられ良い年越しとなりました。

寄稿 卒業 40 年 08 ありがとう中大 出口 節子 (商・会計)

私は中央大学商学部会計学科で学びました。大学1年の半ば頃から、ボランティアサークルの“青い鳥”に加入しました。障害を持っている方、事情があって両親と暮らせない子供たち…さまざまな方々に多くのことを学ばせてもらい歓迎をうけました。先輩や仲間の刺激のおかげで、保育士資格試験にチャレンジすることにしました。東京・神奈川・埼玉・山梨とさまざまな県で受験して大学卒業頃資格をとれました。山梨へ友達と受験しに行った時、美味しいプラムを買ったのを覚えています。「財政再建を卒論にした保母だ」とゼミ仲間に言われながら、卒業後、東京世田谷区立保育園に就職しました。働きながら、必死に勉強して、子供たちと楽しく過ごす中多くのことを学ばされ励まされました。

結婚して石川県に行き、子供を3人育てながら相変わらず保育園・福祉施設で働いています。どこへ行っても素敵なお出逢いがあり、何か資格試験や自分を高める勉強をし続けています。中央大学の図書館で駅から歩いてくる人を見ながら夢をふくらませて勉強していた。あの頃の私が62歳になった現在も残っています。

私の3人の子供も大学から一人暮らしを始めて、大学での

勉強やサークル・友だちが大好きでした。部屋に置いてある本やエッセイを見ると私にそっくりだなと思います。

長男は東京でアメフトに夢中になりながら現在入籍・挙式とコマを進めています。長女は大阪にいて「困ったことがあったら何でも言ってや」と心強いことを言ってくれます。次女は福岡で働いています。家族友達とも離れて「さみしくないの?」と聞くと「ゼンゼン気楽や」と笑っていました。3人とも小さい頃から嫌なことがあっても笑って乗り越えてきました。そんな子供たちを育てられ嬉しく思っています。

私自身は中央大学で学び、あちこちにアンテナをはって、好奇心を持ちいろいろと学ぶ姿勢が身につきました。中央大学で出逢った人たちともずっとつながり、いつ逢っても、心が和みます。私から中央大学は切り離せない。「ありがとう本当にいつまでも…中央大学!」これからもご発展をお祈りしています。



同期の皆さんの寄稿をお待ちしています!!

同じ時代に同じキャンパスで過ごした同期ですが、誰一人「同じ人生」はありません。思い出話もいいし、これからの抱負や決意を書いて可。自慢話だって結構。後悔や悔いを語ってもよし。同じ時代を生きた仲間の話を集めています。



あの日、あの頃
白門58会

白門58会の会員資格は原則「1979年（昭和54年）中央大学に入学、または1983年（昭和58年）に中央大学を卒業した」人。留年、中退を問いません。今後も大勢の会員からの投稿を期待しつつ、それぞれの人生を振り返る資料として、1979年から現在までの世の中と中央大学の出来事を振り返ってみました。（事務局・中川順一 文・文）

入学・卒業から現在までの世の中と中央大学の出来事を振り返る

参考●<https://chuo58.com/kaiko/> <https://suwashobou.jp/jibunshi/index.html>

多摩の山にサーファー (1979~1982)

1979年（昭和54年）1月13・14日、初の共通1次試験（大学共通第1次学力試験）が全国一斉に行われました。大学入試改革として実施されたこの試験は、現在の大学入試センター試験の起源となるものでしたが、当時の受験生にとっては大きな制度変更でした。5教科7科目1000点満点、国立大学一期校・二期校の廃止などで、志望校の変更を余儀なくされた受験生も多数いました。

そのような受験時代を経た学生が入学した当時の中央大学は、文系学部の多摩移転2年目。多摩動物公園駅から大学までの短絡路「ヒルトップ隧道」（歩行専用トンネル）も完成し、「アクセスが向上した」時期です。

移転以前の駿河台時代は、学生運動が盛んな大学の一つとされていて、移転はその沈静化も目的ではとも言われました。紛争から10年を経過していたにもかかわらず、学友会のサークル活動は「仮執行体制」のままでした。79年末からは「学費値上げ反対運動」が行われ、ヘルメット姿の学生が学内で隊列を組み、機動隊が正門付近に派遣され大学はロックアウト。1年生の私たちの最初の学年末試験は、多くがレポート試験になりました。79年度文系学部入学生の初年度納付金は約56万円。その後、スライド制で上昇していきます。ちなみに2024年度の初年度納付金は129万7,300円（文）～183万8,000円（理）となっています。

もっとも多くの学生は学内問題や政治活動には無関心。団塊・全共闘世代がいろいろやらかした後の我々世代は「しら

け世代」とも言われました。小松政夫が『しらけ鳥音頭』を歌っているのを聴くのは高校時代の1977年（『みごろ!たべごろ!笑いごろ!』）。実際にしらけていたかどうかはわかりませんが、各大学ともテニスサークルが続々と誕生し、ニュートラ、ハマトラといったファッションが流行。多摩校舎にも陸（おか）サーファーがたくさんいました。

1979年のイラン革命により日本は第二次オイルショックに見舞われます。その数年前の第一次ほどの影響はなかったものの、物価上昇や経済成長率の減速がみられます。その後景気は徐々に回復基調にあったものの、学生の就職活動は全体としてはやや厳しい状況でした。当時の人気企業は文系では三菱商事、三井物産、サントリー、理系は日立、東芝、NECなど。1980年『Dr.スランプ』連載開始、1981年『ダカーポ』創刊。FMラジオから盛んに流れる『いとしのエリー』（1979年）、『守ってあげたい』（1981年）、『ルビーの指環』（1981年）などの曲をカセットテープに録音して聴いていた人も多かったのでは。

1万円札を振ってタクシーを止めた (1983~1991)

1983年3月24日に後樂園、25日に多摩で中央大学第100回卒業式が挙行されました。中大の前身・英吉利法律学校は1885年に創立されたので、この年はまだ100年経っていませんが、創立翌年には早くも第1回の卒業式が行われています。その後も、戦時中の繰上げ卒業など年2回開催された年もあり、1983年（1982年度）の卒業式が100回目となったのです。



中央大学100周年は、私たちが卒業した後の1985年。当時の学員会会長・大川博氏が東映の社長であったことから、記念映画にはナビゲーター・古谷一行氏、ナレーター・丹波哲郎氏など豪華OB俳優が登場しています。母校愛溢れる丹波さんは「霊界にも白門会がある」と言ったとか。

80年代初頭に流行したのがニュー・アカデミズム。その先鋒とも言われた栗本慎一郎氏が「新人類」なる言葉で当時の若者を表現。1960年の前後数年に生まれた世代を括るようですが、果たして私たちは「新人類」だったのでしょうか。朝日新聞社『新人類図鑑』に登場するのは、泉麻人氏(1956年生まれ)から結城恭介氏(1964年生まれ)の範囲です。

1987年、日本テレビが箱根駅伝のテレビ中継を開始。2年後、箱根の電波障害を克服して完全生中継を実現。この間、中大駅伝チームは3位、5位、3位と健闘。

1989年1月8日、昭和から平成へ。昭和64年は1週間でした。この年公開の『バック・トゥ・ザ・フューチャー PART2』が描いた「未来」は2015年で、クルマは空を飛んでいました。劇中の悪役ビフ・タネンのモデルはドナルド・トランプ氏。1989年にベルリンの壁が崩壊し、1991年にソビエト連邦が消滅。私たちが子供の頃はソ連をロシアと呼ぶのは年寄りでしたが、今やロシアをソ連を言い間違えるのは年寄りの証拠です。

同期の多くが入社3～4年目を迎えた頃、日本はバブル景気に突入します。空前の好景気で、この頃に入社する後輩たちは「バブル世代」。彼らをうらやましく思いつつも、それなりの恩恵を受けたサラリーマンも多かったのでは。接待帰りにタクシーが捕まらず、何枚か1万円札を振って見せながら空車を捕まえたという話もありました。

株式や不動産を中心にした資産の過度な高騰で大儲けした人もたくさんいましたが、後のバブル崩壊で痛手を受けた人も少なくありませんでした。株価は1989年の大納会で3万8,915円87銭をつけたのをピークに翌年1月から暴落に転じました。2月に土地バブル潰しのための「総量規制」が通達されたことが、バブル崩壊の引き金とも言われています。

「失われた10年」の30代 (1992～1999)

バブル時代の恋愛模様として語られる 트렌디드라마では、

同年代の浅野温子さん、浅野ゆう子さんの「W浅野」が活躍。2人が共演する『抱きしめたい!』(1988年)はバブル絶頂期ですが、 트렌디드라마の代名詞『東京ラブストーリー』や『101回目のプロポーズ』の放送は1991年。また、バブルの象徴としてよく取り上げられるディスコ「ジュリアナ東京」のオープンも91年。「お立ち台」写真の多くは、バブル経済崩壊後ということになりますが、多くの人にまだその実感はありませんでした。

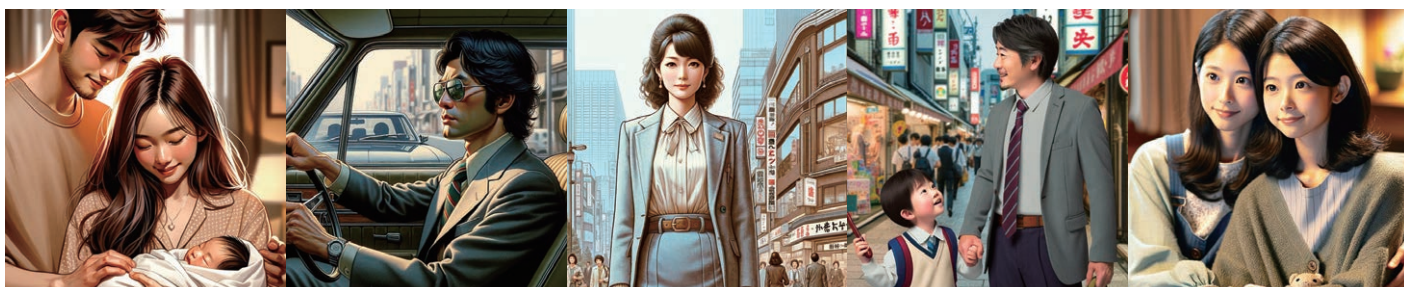
しかし、「失われた10年」あるいは「20年」とも言われる景気低迷と、現在に至る日本経済の停滞はバブル崩壊から延々と続くことになります。1991年から2003年までで181行の銀行が倒産し、1992年度から2002年度までに預金保険機構が救済金融機関に援助した資金の総額は25兆円とされています。

80年代後半から90年代初めにかけてを振り返り、出産・子育てで大変だったという同期も多いはず。子供の頃に見たテレビアニメ『ひみつのアッコちゃん』(1969年＝第1作)のリメイク版が1988年(第2作)と1998年(第3作)に制作されています。親子で見たという人もいるのでは。第1作で豪華客船の船長だったアッコちゃんのパパは、第2作ではニュースキャスター、第3作はカメラマンとなっています。それがその時代の子供にとって、カッコいいパパの職業だったのですね。

1993年に中央大学は総合政策学部を開設。文学部開設以来42年ぶり。80年代以降、各大学が学生獲得のために学部学科を新設する中、出遅れが指摘されていました。1979年に東都リーグを制して全日本大学野球選手権に優勝した中大硬式野球部は、その後は低迷し2部への降格も。1999年、花田真人・阿部慎之助のバッテリーで10年ぶりに1部復帰を果たします。一方、正月のテレビ中継で人気が高まってきた箱根駅伝では、1996年に32年ぶり14度目の優勝を成し遂げます。

不惑で迎えた「21世紀」 (2000～2010)

「ミレニウム」という言葉が盛んに使われた2000年前後の日本経済は、依然として成長の勢いを取り戻せずにいました。それでも情報通信の分野では新しい機器やサービスが登場し浸透していきます。iモードサービスが登場し「ケータイ時代」が始まり、『Windows 98』の普及と定着で、インターネット関連企業やベンチャービジネスへの期待も高まり、「ITバブ



ル」という現象も見られました。また、小泉純一郎首相の劇場型政治により「構造改革」が進められ、郵政民営化なども断行されました。小泉氏は「自民党をぶっ壊す」と言っていたことが、今も壊れずにありますね。

2000年のシドニーオリンピックでは、日本選手は金5、銀8、銅5を獲得。銅メダル獲得の競泳女子400mメドレーリレーの中村真衣、田中雅美、源純夏は中大の現役水泳部員でした。スポーツでは、02年のサッカーワールドカップ日韓共同開催で「ベッカム様」が人気に。

景気低迷とともに「勝ち組」「負け組」の格差社会も進行。03年に六本木ヒルズがオープンするなど、高級タワーマンションや外資系ホテルなどが建ち始める一方で、貧困問題も大きく報じられるようになってきました。05年には秋元康先輩(文学部中退)プロデュースによるAKB48がデビュー。大ヒット『ヘビーローテーション』は10年に発売。

中央大学では03年に、後樂園キャンパス新3号館が竣工しています。また同年に卒業20周年を迎えた昭和58年卒業生に対して、大学側から年次同窓会設立の働きかけがあり、翌年に「白門58会設立準備会」が発足しました。「白門58会ホームページ」は04年1月から開設されました。

ホームページ開設を機に、会の参加メンバーを募り、学員会支部設立を準備する団体として学員会からも支援を受け活動してきました。支援の内容としては、設立準備連絡に関する通信費の補助、ホームカミングデーなど大学施設利用にあたっての学員会支部に準じた扱いなどです。この頃、人数は少ないものの活動は活発で、年3～5回の会合、ホームカミングデーへの参加、大学125周年募金活動への協力、設立に向けた案内のダイレクトメール送付などを実施してきました。

しかしながら、正式に学員会支部となるには、数年の期間が必要でした。その最大のネックは、「学員会に加入している者(学員会終身会費納入者)100名以上」の賛同という点で、個人情報取り扱いが厳しく制限される時代にあって、勧誘のために卒業生の連絡先を収集することは大変困難でした。個人情報保護法の全面施行は、05年4月からです。

ITの進化とともにコミュニケーションの手段も多様化します。2004年に日本発SNS・mixiが登場、アメリカ発のFacebook、Twitterの日本上陸は2008年です。

この頃の中央大学のトピックは、法務研究科(法科大学院



2010年に創刊した「白門58会会報」も15年目を迎えた。

＝ロースクール)が2004年に開設、翌05年に公共政策研究科(公共政策大学院)が開設されます。08年には理工学部生命科学科を設置、また同年に戦略経営研究科戦略経営専攻(経営大学院＝ビジネススクール)も開設されました。

ちなみに20年前の04年は新紙幣が発行された年。1万円札(福沢諭吉)、5000円札(新渡戸稲造から樋口一葉に)、1000円札(夏目漱石から野口英世に)が変更になりました。1万円札が聖徳太子から福沢諭吉になったのは1984年。2024年には渋沢栄一に交代します。私たちは「聖徳太子を拜む」で意味が通じる最後の世代です。

50代で遭遇した東日本大震災 (2010～2019年)

2011年3月11日に東日本大震災が発生しました。阪神淡路大震災を見てきた世代も、震災と津波、そして原発事故という未曾有の大災害に驚愕しました。繰り返し流される被災地の映像により、多くの人々がさまざまなことを考えさせられました。

震災後の12年、政権交代から3年半で民主党政権が倒れ、第2次安倍政権が発足。その後の長期政権で経済政策「アベノミクス」を推進するものの、「一強」政権下での「モリカケ」や「桜を見る会」などの事件報道を通じ、「付度」は難読漢字ではなくなりました。

2011年12月、42年間続いたテレビ時代劇『水戸黄門』が終了。うっかり八兵衛・高橋元太郎氏は2000年に、毎回入浴





コロナ禍で始まった60代 (2019~)

2019年5月、同年代1960年生まれの徳仁親王が天皇に即位。令和に改元。メーデーが改元の日となるとは思いませんでした。

2019年後半から中国をはじめとした海外で新型コロナウイルス感染症が流行。日本国内では2020年1月末から感染が報じられるようになり、政府は同年4月7日に東京、神奈川、埼玉、千葉、大阪、兵庫、福岡の7都府県に緊急事態宣言を行い、4月16日に対象を全国に拡大しました。その後、感染は拡大と小康を繰り返し、2022年(令和4年)9月末までで7回の感染拡大の「波」を繰り返しました。震災復興を世界にアピールする目的と経済の活性化も意図して誘致された2度目の東京オリンピックも、予定より1年遅らせ無観客で開催されるなど、経済・社会にさまざまな影響を与えました。

2020年は同期の多くが「還暦」を迎えた年です。コロナ禍に突入し、58会の活動はほとんどできずにいましたが、会報とその投稿募集を積極的に行うことで会員登録者も増大しました。

23年5月、新型コロナの感染症分類は季節性インフルエンザと同じ「第5類」となります。感染自体はなくなったわけではありませんが、各種制限が解除・緩和され、いわゆるコロナ禍は収束に向かいました。

コロナ禍がほぼ収束した23年、中央大学は文京区茗荷谷の新キャンパスに法学部を全面移転。これにより大学は多摩(経済・商・文・総合政策・国際経営)と後楽園(理工)、市ヶ谷田町(国際情報)、茗荷谷(法)と駿河台、小石川キャンパスの6拠点となり、学生数は多摩と都心がほぼ半々になりました。古いOBは年下の卒業生に「駿河台?多摩?」と聞きますが、我々の世代は「トンネル?モノレール?」と聞きます。いずれ「多摩?都心?」と聞く時代も来るのでしょうか。24年3月には、多摩と後楽園(都心学部)の2か所で卒業式が開催されました。

中央大学が新しい歴史を歩み始めた今、多摩完全移転後入学の白門58会同期は卒業して40年を超えました。そして同期の多くは新しいキャリアを歩み始めようとしています。本会報ではこれからも、同期の消息や活躍を追っていきます。

変わっていく時代についていくために、この記事のイラストはChatGPTにやらせてみました。



会員の近況／メッセージ



第二の人生を歩む

内山 勢 (経・経)

現役、浪人、留年が思うので年齢は多少のずれがあっても、ほぼ65歳の年齢に達して、会社では「第二の卒業」を迎える頃だと思う。私も今年、会社を卒業する。

約40年、マスコミの世界にどっぷりつかり、朝から晩まで家庭を振り返る余裕もなく、それなりにやりがいがあったが、振り返ると、世の中にどんな役に立ったのかと思うと、虚しさも漂う。これは「企業戦士」が求められた我々の世代では多かれ少なかれそんな思いではないだろうか。

そういう思いもあって、第二の人生は、これまで培った経験を生かしながら、社会貢献に尽くそうと思っている。とはいえ、生活していかなければいけないので、ボランティアではなく、多少の収益がある仕事を創業出来ればと思っている。それが結果的に社会貢献につながればと。いろいろ「妄想プラン」はあるが、軌道に乗ったら、皆さんに紹介して協力を仰ぐこともあると思う。その時はよろしくお願いします。

「隠活宣言!」

小原 伯夫 (法・法)

年金受給開始年齢となる私は、いよいよ隠居活動(「隠活」。私の造語です)をスタートします!

「京都詣」「鎌倉散歩」「温泉につかる」「写真を撮る」「読書三昧」「映画を観る」「落語を楽しむ(◎同窓の林家つる子さん真打昇進おめでとうございます!)」「中島みゆき(2024コンサート行きます!)・古楽器などの音楽に浸る」「学ぶ(放送大学で履修中)」などの道楽や、「旧知の方々と邂逅」「孫の世話(孫活)」「身の丈に合った世の中へのお役立ち」など、今まで封印してきた妄想は膨らんでおります。

そのためには「健康」「時間」「先立つ活動費」「家族の理解」などの環境を整えること、大切ですね。こんな感じで、「私の老いじたく」は密かに進展中です。

何かしらの道楽や活動で一緒できるご縁がございましたらありがたいです。皆さま、同期会で会いましょう。

空手部卒業

青沼 英子 (文)

卒業して40年。文学部卒というより空手部卒業という学歴です。63歳になる今現在も、カルチャー等3か所で空手の指導をしています。また趣味の盆踊りは本番、練習ともに一年中、楽しんでいます。

変わったこと、変わらないこと

佐脇 理恵 (文・文)

各駅停車しか停まらない自宅の最寄駅は、時の経過からとり残されたかのようで、40年前との間違いさがしができそう。

それでもよく見て思い出すと変わったところはある。駅前の銀行の支店は乗り換え駅の大きな支店に吸収され、小さな駅のホームとホームを渡るエレベーターができた。

中大時代、長期の休みになるとアルバイトしていた会社の管理職から「君はなんで4年制大学に進学したの?」と聞かれたので、一応「教員を目指しています」と答えたら、「教員ならしょうがないな。私はね、女の子は高校か短大で十分だと思っているんだよ。短大ならお見合いの時に役に立つね」と、本当にそれが幸せなことなのだと信じている様子だった。今、そんな事を言ったら、もちろん大変である。今はそんな事を考える人も少なくなっていることだろう。

変わるわけがないと40年前の私は思っていたが、40年の年月の間に社会の動きや考え方が変化していくものだ、それだけの年月を生きて来たのかと思った。

変わらないものもある。

最寄駅で言うと、せまい駅前広場、文房具店、40年前と同じ光景である。そして、中大時代の友人達。卒業後の仕事や立場は様々でも久しぶりに会うと一瞬にして学生時代に戻ってしまう感覚になる方も多いことだろう。

これからの10年、卒業後50年となると私自身が大きな変化をせざるを得ないことだろう。健康に気をつけて好ましくない変化をできるだけ少なくする努力をしながら、友人達と変わらない話をしたいと思っている。

復活（セカンドオピニオン）

おーちゃん

卒業後 1990 年 30 才で税理士資格を取得。地元沼津で税理士業務をしておりましたが 2007 年 47 才時の脳卒中で緊急入院しました。

最初に担ぎ込まれた救急病院での診断は脳内出血で、生命に別条はないが、一生寝たきりという絶望的なものでしたが、今では当たり前ですが、当時はまだめづらしかったセカンドオピニオンの結果転院しリハビリを含めて 4 ヶ月の入院の後、退院後仕事にも復帰し病前のごとく暮らしています。

当初は左手、左足の運動マヒがありましたが、現在ではゴルフにも行けるようになりまたコロナ禍前にはよく行っていた、阪神タイガースの応援にも行けるまでになりました。

確かに私も治療やリハビリにと励みましたが、あきらめずセカンドオピニオンに走ってくれた家族や真摯に治療訓練にあたってくれた医療機関の方々には頭が下がるばかりです。

子供が楽しく学習するために

荒井 辰雄（法・政）

ここ数年、家庭教師や学習塾の講師として、小中学生に英語や数学（算数）を教える仕事をしています。

子供に教えるとき、なるべく、楽しく学習できるようにする、ということを心がけています。子供にとって、学習することがつらかったり、したくなかったり、ということが少なくありません。教えられている側がつらそうにしているのは、教えている側もつらいものです。また、我慢しながら学習するより、進んで学習した方が効果があがるものでしょう。だから、なんとかして、楽しく学習してもらいたいと思うのです。以下、そのためにどうしたらいいのか、私なりにまとめてみました。

その1 肯定形をつかう

日本語というのは、否定形をよく使います。でも、学習の場面で否定形は、ネガティブな印象を与えてしまいます。たとえば、

「この問題ができないと、先へすすめない」

そう言われたら、やる気がなくなりそうですね。

「この問題ができれば、先へすすめる」

意味は同じですが、こう言われれば、がんばろう、と思いませんか。肯定形は、子供の気持ちをポジティブにします。

その2 できているところに注目する

テストが返ってきました。80 点。○もあれば、×もある。見るなり×のところに注目して、

「あ、この問題、間違えたんだ……そんなに難しくないのに……」いきなりこんなことを言われたら、がっかりですね。

まずは、○のところを見ましょう。どんな問題ができているのか。難しい問題ができているなら、

「この難しい問題、よくできたね」

と言ってあげましょう。×のところについては、

「ここもできたら、もっとよかったね」

という風に指摘します。

できているところを注目します。できているところをとりあげてもらうことで意欲がわき、より楽しく学習することができます。

その3 比較しないようにする

兄弟を教えていると、どうしても思ってしまうことがあります。

弟はよくできるのに、兄はあまりできないなあ、とか。兄の方は、苦手な英語をがんばって克服したのに、弟の方はさっぱりだ、とか。

どうしても、比較してしまうのです。兄弟に限らず、同級生がいれば、比較してしまうことがあります。

でも、比較された子供の方はどうでしょう。自分より、弟の方が評価されている。自分より、あの子の方が期待されている。そんな気持ちになるでしょう。

比較されて、ポジティブになることはありません。自分は、評価されていない。自分は、期待されていない。学習することが、楽しくなくなってしまいます。

比較してほめるのもよくありません。それは、余計な優越感を生み、慢心につながります。

頭の中で比較してしまうのは、仕方がないでしょう。気をつけなければならないのは、それを本人の前で口にしたり、態度に表してしまったりすることです。子供が、比較された、と思わないようにすることが大切です。

ずいぶんえらそうなことを書いてしまいました。もちろん、私の指導がすべてうまくいったわけではありません。それどころか、失敗と試行錯誤の連続でした。ただ、失敗を繰り返しながらも、その中から少しでもよりよい指導はないかと模索して得た、私なりの方法を紹介してみました。

みなさんが、お子さんやお孫さんを指導して、何か感じたことなど、紹介していただけると、ありがたいです。

編集後記 & 活動報告

多摩丘陵を歩く 白門ハイクラリーに参加

詳細はホームページで
会計 柳 季幸 (文・文)



11月3日文化の日、学会会主催の『2023 白門ハイクラリー』に有志6名で参加してきました。このハイクラリー、スマホにアプリをダウンロードして各チェックポイントでスタンプを入手しながら山歩きという中高年には厳しい（そうじゃない人もいますが…）企画で、上手くできるか私はちょっとドキドキでした。

コースは懐かしの多摩校舎を出て、多摩動物公園の外側を通り高幡不動尊まで歩く“かたらいの道”という散策コース。約5キロの道程。ゴールは再び多摩校舎1号館で受け付け。

11月なのに25℃超えの夏日！暑かった！でも、頭上に青

空の広がる爽快な天気で、程よく乾いた秋の道をてくてく歩き、いい気分転換になりました。



維持会費納入のお願い

白門58会は入会金・会費無料で運営しています。会の運営費は、会員の任意の維持費と会報の広告、学会本部からの支援金などによって賄っています。維持費は会報発送費のほか、白門支援金など学会や大学への寄付に充てています。ご協力をお願いします。

今年度は白門飛躍募金等に寄付をしています。

維持会費は 1,000 円以上
協賛広告は 30,000 円以上
…いずれも、いくらでも結構です。

維持会費ご協力の方には、金額にかかわらず学会グッズを謹呈します。同封の振り込み用紙をご利用ください。

振込先

ゆうちょ銀行(武蔵府中郵便局)
00180-5-433209
白門58会(ハクモンゴハチカイ)

58会の活動はFacebookで

全国有名書店、Amazon等
インターネット書店で発売中



まんが・
イラストで
みる

江戸の暮らし 衣・食・住

「ポケット倶楽部」編集室
まんが・イラスト 桐丸ゆい

定価 1,000 円 (+税)

太平の世ともいわれた江戸時代、人々はどんな暮らしをしていたのでしょうか？ 江戸時代の住宅や衣服、食についてのコラムやまんが、イラストが満載。衣・食・住、そして暮らしそのものに焦点を当て、江戸時代をひも解いていきます。

株式会社ノラ・コミュニケーションズ

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場 2-14-6 アライビル 7F
TEL 03-3204-9401 FAX 03-3204-9402

諏訪書房

<https://noracom.co.jp/>